

寅彦の見た風景 9 【荒倉峠】

野村 学

○「六月二十二日 日 曇后雨

午前は夏へ端書したため、微分方程式復習を終る。午後秀彦と自転車にて高岡へ向ふ 荒倉を越え弘岡に入るに道路の砂利深くして車重く行悩む。仁淀川近き頃雨降り出で空模様悪敷なりたれば引きかへす。」(明治 35 年 6 月 22 日の日記)

はじめに

明治 35 年夏。高知県西部の海辺のまち・須崎での療養を終え、大川筋の自宅で体力の回復につとめる寅彦青年。この日は、同じく海辺の村・種崎で療養中の夏子さんへ手紙を書いたあと、義兄・別役備(春田)の甥・安岡秀彦とサイクリングに出かけたようだ。しかしあいにくの梅雨空。路面のコンディションも悪く目的地・高岡に達する前に引き返すこととなる。今回は寅彦青年の越えた荒倉峠を訪ねてみよう。荒倉峠こそは小説「嵐」(※1)の世界へ行くのに越えねばならぬ峠でもあった。峠とそこへ行くまでの道筋で果たしてどのような風景に出会うことができるだろうか。

荒倉峠

高知の旧城下町は三方を山、一方(東)を内海に囲まれた平野に立地するが、荒倉峠はその南西、朝倉地区と春野地区との境に位置する。この付近の地質は複雑で、形成年代・形成場所の違う東西帯状の地質体(四万十帯及び秩父帯)が並列に重なりあって朝倉-春野間の出入りを阻んでいる。その容易ならざる出入りのルートが“荒倉越え”であった。昭和 28 年に^{トンネル}隧道が抜けるまでこの道は生き続けた。

『土佐の峠風土記』(※2)から引用すると「荒倉峠への道は(略)高知市から県西部に至る重要往還として、古い歴史を持つ峠であり、高知市から西行する場合、最初に遭遇する難所でもあった。」とある。その陰しさ故か、ここには奇譚も多い。たとえば昔話「狼医者」(※3)や田中貢太郎による実話怪談「荒倉の狸」(※4)、「朝倉 150」(※5)などの舞台は荒倉峠である。また「高知市域における異界の変容」(※6)によれば荒倉を含む朝倉地区にはケチ火、狸、亀の化物や^{がま}蝦蟇の化物が出現することになっている。その他、濱本浩が「犬」(※7)という短編小説の中に荒倉峠を登場させ、荷車で生鰹を運ぶ男達が狼の群れに襲われる迫力あるシーンを描くなど、荒倉峠は何やら怪異の気配の濃厚な場所である。

峠を訪れる前に、この日寅彦たちの使用した自転車はどのようなものだったのかということを考えてみたい。

当時の自転車

寅彦たちの乗った自転車はどのようなものだったか。現代の軽快車のようなものではもちろんない。ないどころか、おそらく「固定ギア」の自転車だった。「固定ギア」とはペダルの動きと後輪の動きがチェーンを介して直結している機構のことである。つまり「ペダルを前へ踏めば前進し、後ろへ踏めば後進」する（※8）。このことを裏付ける記述が寅彦日記にある。すなわち、同年6月10日の日記「午後秀彦と公園馬場にて曲乗（後進）を稽古す。」という記述だ（傍点筆者）。自転車で「後進」という行為を行うためには、後輪の動きとペダルの動きが連動していなければならない。そうでなければ、つまり現在われわれが日常乗る自転車のようなものであれば、うしろに漕いでもペダルは空回りし後進することはない（「フリーホイール」という仕組みのおかげ）。「後進ができる」ということはつまり「固定ギアである」ということの証拠である。それにしても、よくこのような自転車で標高100メートルの峠を越えたものだと思う。登りは兎も角も下りは大変だったのではないだろうか。なんとすれば勢いよく回転する車輪にあわせてペダルもクルクルと回るものだから。

訪問記

秋晴れの早朝、私は荒倉峠を目指し寅彦邸を出発した。寅彦青年に倣って自転車である。庭の銀杏の歩道にこぼれ落ちた黄色が鮮やかだ。透明な朝の空気を映して大川の水も美しい。寅彦たちは荒倉峠までどのルートを通ったのか。これについては確定的なことは言えない。この日の日記には何も記されていないからである。しかしながら当時の道路事情や他日の日記の記述から蓋然性の高いルートを推定することは可能である。私の考えたルートは以下の通り。すなわち、寅彦邸-①通町-②思案橋-③紅葉橋-④朝倉横町（柳の番所跡）-⑤荒倉峠である。

①通町

自宅を出発した寅彦はまず通町を目指したのではないだろうか。例えば同年別の日の日記に「通町にて自転車を借りて朝倉に至る（4月30日）」や「朝自転車にて朝倉へ暇乞に行く。通町にて危く小供に乗りかけんとして肝をひやしたり。（8月22日）」などという記述が見られるからである。朝倉へ行くのに通町を経由する事が多かったことがわかる。事実『高知市史跡めぐり』（※9）には「高知城下から西部への通行人の公道であったので通町という」などと説明されている。高知街（旧城下町）から西方へ往く場合、通町が最も一般的なルートであったことが窺える。また日記には「通町に行き自転車借りて乗る（5月9日）」ともある。この頃の通町には貸し自転車屋があったようだ。もしかすると、この日乗った自転車もここで借りたものかもしれない。

通町は前回紹介した水通町の一本南の通り。現高知市上町1丁目から5丁目にあたる。

小さな喫茶店や昔ながらのタバコ屋さんが並ぶ。ところどころ古い木造家屋や赤い煉瓦塀が残り、よく手入れされた庭木の松もみえる。貸し自転車屋はもうない。

② 思案橋

城下町からの通り（本丁筋・水通町・通町）は、ここで県西部へとつながる土佐街道へと集約される。その街道の入口に思案橋があった。寅彦たちも、江戸時代には番所も置かれていたこの思案橋をとおり鏡川堤を西に向かったことだろう。

このあたりのようすについて、寅彦先生は中学時代の日記に次のように記している。「通町ノ五丁目ヨリ本町ニ出デントスル処程怪シキ処ナシ（明治29年3月30日）」。これは当時、思案橋の西方に遊郭（玉水新地）があったことに基づく記述だろう。まさに「通町ノ五丁目ヨリ本町ニ出デントスル処」に思案橋はある。知らなければ気が付かないほどのとても小さな橋である。ここから西に向け街道を走る。この道は周囲より地形が高くなっている。1キロメートルほど走ると堤防と合流し南に鏡川が現れる。葦原の向こうに川面がチカチカと光る。

③ 紅葉橋

鏡川沿いを走る寅彦達は、やがて現れる紅葉橋を南へ渡ったことだろう。『改定増補版高知観光ガイドブック3』（※10）には「江戸時代、城下から思案橋の番所を出て西へ向かう場合、このあたりが渡河点となっていて、“雁切りの渡し”と呼ばれていた。」とある。また「紅葉橋は明治のはじめに長さ40間余幅2間（約72m×3.6m）の仮橋が造られ、五台山に渡る青柳橋に対して紅葉橋と名付けられたという。」ともある。寅彦たちも鏡川に架けられたこの紅葉橋を経由して朝倉村に入ったことだろう。橋の袂から南を望むと前回紹介した鷲尾山系の山並みが東西いっぱい広がる。その西端に荒倉峠はあるが、今は高い建物に隠れてその姿は見えない。西風に吹かれながら橋を渡る。

④ 朝倉横町（柳の番所跡）

紅葉橋を渡った寅彦たち。ここから荒倉峠へ通じる街道沿いに伊野部姉宅があった。小説「竜舌蘭」（※11）を引用し、このあたりの様子を見てみよう。

○「自分の住まっている町から一里半余、石ころの田舎道をゆられながらやっと姉さんの宅へ着いた。」

○「雨は煙のようで、遠くもない八幡の森や衣笠山もぼんやりとじんだ墨絵の中に、薄く萌黄をぼかした稲田には、草取る人の蓑笠が黄色い点を打っている。」

○「立場まで迎えにやった車が来たので姉さんと門まで送って出た。車が柳の番所の辻を曲って見えなくなった時急に心細くなって、一緒に帰ればよかったと思う。」

ここに描かれる「柳の番所」について『生誕百年記念増補改訂 寺田寅彦郷土随筆集』の注解によると「現在の高知市朝倉（旧土佐郡朝倉村）の横町にあった」とある（※12）。手元にある道路地図で確認すると朝倉横町の北に沿う道に「番所」というバス停がみえる。おそらくここが「柳の番所」跡だろう。試しに近くの姉宅前から東をみると確かにこのバス停付近で道は左へ緩く曲がり、果たして主人公の少年（≡寅彦少年）が母を見失った辻はここだとわかる。小説のハイライトとなる場面を見ることができる貴重な場所だ。

西に目を向けると建物の間から八幡の森や衣笠山がその姿を覗かせる。道に沿って新しい宅地が広がり、ところどころに畑が取り残されている。学生のまちであるのに人の気配が少ないのは授業中のためかコロナの影響か。ヒヨドリの鋭い鳴き声と工事の音が遠くに聞こえる。

寅彦少年の心細い心持ちを追体験した後はいよいよ荒倉峠である。なお、バス停「番所」は残念ながら平成 29 年 3 月末に廃止された（※13）。

⑤ 荒倉峠

柳の番所跡から街道をしばらく南下すると鏡岩の集落にたどり着く。この先から峠に通じる山道が始まる。

ここで当時の天気について記しておきたい。寅彦日記には「曇后雨」と記されているが、気象庁のデータによると、この日の最高気温は 25℃、降水量は 3.5mm。6 月 22 日といえば梅雨真っ只中であつたことだろう。高知の梅雨は非常に蒸し暑い。降水量こそ少ないが、湿度は相当高かつたはずだ。現に日記には「荒倉の上りにては汗と雨とに顔は洗うが如く眼にしみて痛む」とある。それに比べて今日の天気のなんと気持ちの良いことだろう。寅彦先生になんだか申し訳ない。それにしても明治 35 年の気象データが存在することに驚く。そして寅彦先生の記録（日記）と気象台の記録が合致することに何やら感動を覚える。

鏡岩の住宅地を抜けると雑木林の山道にさしかかる。寅彦たちもここから峠を目指したはずだ。荒倉の山が目の前に迫る。それにしても思いの外、坂道がきつい。息が切れる。私はすぐに足を着いた。寅彦たちもやはり息を切らせながら上つたのだろうか。自転車漕いでみたり、降りて押してみたり。何度も乗り降りを繰り返しながら約 40 分。峠に着いた。体力を使い果たした感がある。しかし、しんどい思いをした分だけ寅彦先生との一体感を味わうことができた気がする。これも文学散歩の醍醐味だろう。しばらくここからの

風景を眺める。すすきが風に吹かれ、鉱山の操業音が微かに聞こえる。あらためて日記を読む。

“午前は夏へ端書したため、微分方程式復習を終る”

この日、夏子さんに宛てた端書にはどんな言葉が記されていたのだろうか。微分方程式では解くことのできない人生の試練を寅彦先生はどのように捉えようとしていたのだろうか。ふっと目を上げる。そこにあるのは^{てきれき}的礫とした日の光を落とす埃っぽいアスファルト舗装と草木だけ。



峠を越えてしばらく下ると眼下に弘岡の集落が広がる。その中の一本道をしばらく進んだ寅彦たちだったが、雨に阻まれ仁淀川の手前で引き換えしたようだ。我々もずいぶん遠くまで来た。この辺りで引き返すことにしよう。旅のおわりに寅彦青年の見た「嵐」の世界について触れてみたい。

「嵐」の世界への出入り口

荒倉峠は初期の小説「嵐」の世界への出入り口でもあった。小説では海路須崎入り、印象的な春の漁師町風景が描かれているが、実際は初めての須崎行は陸路であった。日記を見ると寅彦先生は高知と須崎を往来しながら療養を重ねていたようだが、四回の須崎行のうち三回までが陸路、最後だけが海路であった。陸路であればこの峠を越えなければならない。日記を引用する。「父上と車を列ねて須崎に到る（9月16日）」、「須崎へ行く 父上

は船、自分は車にて。(11月10日)」、「須崎行。荒倉の坂にて上より来る車と衝突し、車夫同志の喧嘩とならんとせしも事なくて済む。(12月6日)」。

須崎へ行くそのたびに、寅彦青年はいったいどのような気持ちでこの峠を越えたのであろうか。それは誰にも分からない。分からないけれども、後に小説「嵐」が書かれた事実を思うとき、ここから見える景色は「嵐」の世界と分かちがたく結びついた寅彦先生の忘れ得ぬ風景の一つだったと考えることができるのではないだろうか。そしてその風景を透かし見た向こうには、同じ時、同じように、ひとり海辺のまちで療養をしていた夏子さんの姿も見えていたのではないだろうか。ぼんやりとそんなことを考えながら峠からの風景を眺めていると、遠い昔の嵐の音が耳の奥底に響いてくるような気がした。



おわりにかえて

本稿執筆中に山本健吉会長の訃報に接しました。会長とは一度だけ寺田寅彦像の除幕式の際にお会いしましたが、会報記事の投稿のたびにメールを通じてご指導をいただきました。初めて投稿した際には“寅彦の高知での事跡を広く知らせてゆくことは高知に住むものとして是非やらなければならないこと、続けて書くように”との趣旨のお言葉をいただきました。この言葉を力にして、拙い記事ではありますがこれまで書き続けることができました。この場を借りて山本会長に感謝を申し上げます。ご冥福をお祈り申し上げます。

〈参考文献・引用文献〉

※本文中の日記は『寺田寅彦全集 第十八巻』(岩波書店・1998年)から引用

※1「嵐」(『寺田寅彦全集 第一巻』・岩波書店・1996年)

※2『土佐の峠風土記』(山崎清憲・高知新聞企業・1991年)

※3「狼医者」(市原麟一郎編著・『高知・伝説散歩』・土佐民話の会・昭和50年)

※4「荒倉の狸」(青空文庫を参照・青空文庫の底本:「日本怪談全集Ⅱ」・1974年・1975年第2刷)

※5「朝倉150」(青空文庫を参照・青空文庫の底本:「伝奇ノ匣6 田中貢太郎日本怪談事典」学研M文庫・学習研究社・2003年)

※6「高知市域における異界の変容」(高岡弘幸・『特別展 あの世・妖怪・陰陽師-異界万華鏡・高知編-』・高知県立歴史民俗資料館・平成15年)

※7「犬」(濱本浩・『十二階下の少年達』所収・竹村書房・昭和9年)

※8『自転車の一世紀-日本自転車産業史-』(財団法人 自転車産業振興協会編集・発行・昭和48年)

※9『高知市史跡めぐり』(橋詰延寿・高知市観光協会・昭和48年)

※10『改定増補版 高知観光ガイドブック3』(特定非営利活動法人 土佐観光ガイドボランティア協会編著・リーブル出版・2019年)

※11「竜舌蘭」(『寺田寅彦全集 第一巻』・岩波書店・1996年)

※12『生誕百年記念増補改訂 寺田寅彦郷土随筆集』(解題・注解)(橋詰延寿他編集・高知市教育委員会・昭和53年)

※13バス停「番所」について、とさでん交通株式会社様に問い合わせたところ丁寧にご回答いただきました。記して感謝いたします。

